

## 佐土原キリスト教会 2017年7月18日 礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 20 章 19～23 節

### 説教題：教会が語ること

ある教会で、初めて来た人に「お名前は？」と聞くと、「たぬきです」と答えました。冗談だと思った受付の人が「私はキツネです」と言ったら、叱られました。「たぬき」は「田貫さん」でした。日本の名前の種類は 30 万と言われますから、色々なお名前があります。さて、日本語で「教会」と訳されている言葉は、原文のギリシャ語では「エクレシア」という言葉です。「エクレシア」のもともとの意味は「呼び出された人の集まり」ということです。「教会」は、神に呼び出された人が集まって出来上がって行くものなのです。誰かが自分勝手に作り出して行くものではありません。田貫さんも呼び出されて教会に来たのです。「教会」がそのようなものだから、聖書は「教会」について「神の民、キリストの花嫁」等と、神様にとって大切な存在だという表現をしています。それらの言葉から分かることは、神様にとって個々の信仰者お 1 人ひとりももちろんですが、共同体としての「教会」そのものも大切な存在だということです。

今朝の聖書箇所は、イエス様が弟子達の前に御自身を現わされたことを記す箇所です。この箇所でイエス様は 3 つのことを語っておられます。1 つは 21 節「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」(21)、2 つ目は 22 節「聖霊を受けなさい」(22)、3 つ目は 23 節「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります」(23)の 3 つです。この 3 つの言葉は「教会」について大切なことを教える言葉です。従って、この箇所は「教会」について教える箇所だと言うことができます。では、その 3 つの言葉は「教会」について何を教えるのでしょうか。

#### 1: 「教会」のメッセージ

「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」(21)。これはイエス様が弟子達を宣教に派遣するという事です。イエス様は、神の許から携え来られたメッセージを 3 年間に渡って宣べ伝えられました。今度はその仕事を弟子達に委ねるというのです。しかしイエス様の仕事を委ねられる弟子達は、「正にイエス様の仕事を成し遂げて行くだろう」と思われるような人達だったのでしょうか。いいえ。つい 3 日前に「イエスなんて知らない」と言った人達です。人間的に見れば、最も信用できない(相応しくない)人達だったです。しかしその彼らに「あなた方に私の仕事を委ね、世に遣わす」と、イエスは言われたのです。彼らに何があったから、イエス様は御自身の大切な仕事を、彼らに委ねられたのでしょうか。

19 節に「弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが」(19)とあります。しかし、弟子達が恐れていたのは「ユダヤ人」だけだったのでしょうか。ルカ福音書 24 章には「これらの方を話している間に、イエス御自身が彼らの真ん中に立たれた。彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った」(ルカ 24:36～37)とあります。弟子達はイエス様を見て恐れたというのです。「亡霊だ」と思ったから恐れたのでしょうか。それだけではないと思います。

50 年前になりますが、「浅間山荘事件」という事件がありました。連合赤軍のメンバーが浅間山荘に立て籠もって、警官隊と銃撃戦を繰り広げました。この事件が衝撃的だったのは、その事件の前に、彼らが仲間 14 人をリンチによって殺していたということでした。なぜ仲間を殺したのか。信頼していた仲間が裏切って逃げて行きます。そうすると次第に彼らは「こいつも裏切るのではないか」、「あいつも裏切るのではないか」と疑うようになって、裏切る可能性のありそうな者を殺して行ったのです。信頼していればいるほど、裏切りに対する憎しみは強いのだと思います。そして、裏切られた傷というものはそう簡単に消えるものではないのでしょうか。

弟子達はイエス様を裏切ったのです。彼らは「イエス様がマリヤに現れた」ということを聞きました。「もしかするとイエス様は本当に現れたのかもしれない」と思いました。しかし、イエス様を見殺しにした自分達に対して、甦りのイエス様は何と言われるのか、彼らはそれを恐れる思いがあったのではないのでしょうか。ところが甦ったイエスは、彼らの所に現れて「平安があなたがたにあるように」(19)と言われたのです。しかも2回も言われました。ヘブル語では「シャローム」です。「シャローム」は「あなたに平和があるように」という挨拶の言葉ですが、ユダヤ人にとって真の「平和」とは、「神がともにおられる」ということです。だからイエス様は彼らに(なおも)「神があなた方と一緒にいて下さいますように」と祝福を語られたのです。弟子達はイエス様が十字架上で祈られた「父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)の言葉にも、自分達に当てはめて衝撃を受けたでしょう。しかしこの祝福の言葉も、衝撃的な言葉だったと思います。

イエス様は、彼らに手と脇腹の傷を見せました。彼らは、確かに自分達が裏切ったイエス様が甦ったということを知りました。「甦り」は、イエス様が神の許から来られたことを証しました。そしてその方は、十字架で弟子達のために「彼らをお赦し下さい」と祈られ、今また「神が共にいて下さるように」と祝福されたのです。この時、彼らは、ただ赦されるしかない状況でした。その状況で、彼らは、赦されるどころか祝福されたのです。常識では考えられないことでした。彼らは、神の赦しを体験しました。「赦されて神と共に生きる」ということを、身をもって体験したのです。そして、十字架と復活の前のイエス様が何を言おうとしておられたのか、それが分かり始めたのです。

派遣されるためには、語る言葉、運んで行くメッセージがなければなりません。彼らは、この体験を通して神の愛と赦しのメッセージが分かるのです。彼らのために生きて死んだ方がおられました。にもかかわらず、イエスに従っていながら最後まで自分の栄光を求めていた彼らでした。弱さの故に裏切ってしまった彼らでした。そしてイエス様の恨みを恐れていた彼らでした。こんな運命に定めた神を呪っていたかも知れません。だからこそ、神の愛と赦しがどれほどのものか、彼らには分かったのです。イエス様のメッセージが彼らの中に受肉したのです。

初めに申し上げたように、「教会」というのは神によって召し出された者達の集まりです。ということは、弟子達の集まりがそのまま教会であり、ここで弟子達に語られていることは、そのまま「教会」に語られていることだと考えることが出来ます。「教会」は、イエス様のことを、神の愛と赦しを、宣べ伝えるために、世に遣わされているのです。私達が立派な生き方をしているから宣べ伝えるものではありません。自分を宣べ伝えるではありません。どうにもならない弱さを持った私達のために死んで下さった方がおられるのです。私達が希望を持って生きることが出来るように、死から甦られた方がおられるのです。そのイエス様を信じる時、相応しくない者が、それでも赦されて、神と共に生きて行けるようになるのです。私達はその福音のメッセージを語って行くのです。

## 2: 「教会」の根拠

次にイエス様は「彼らに息を吹きかけて…『聖霊を受けなさい』」(22)と言われました。「息を吹きかける」という言葉で思い出すのは、「創世記」の人の創造の記事です。「創世記 2 章 7 節」「神である主は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった」(創世記 2:7)。「息」という言葉は、ギリシャ語でもヘブル語でも「霊」という意味を持つ言葉です。神が息を吹きかけて、人が生きるものになったというのは、神が霊を与えて、人が生きるものになったということです。ここでイエス様が、彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい」と言われたことの意味は、イエス様が聖霊を与えることによって弟子達が神の子として再創造されるということです。

しかし、ここで注目しなければならないのは、イエス様が「彼ら(集団)に息を吹きかけた」ということです。原文には「彼らに」という言葉もありません。イエス様は、弟子達が集まっているその集

まりに息を吹きかけられたのです。つまりイエス様は、「教会」に聖霊を与えられたのです。ここに「教会」が「神の教会」であるところの根拠があるのです。初めに『教会』は神によって召し出された人達の集まりである」と申し上げました。しかし、召し出された者が集まっているから「教会」が特別な場所なのではないのです。それもあります、「教会」は、主イエスを通して聖霊を与えられた場所であるから特別な場所なのです。この最初の「原始教会」とも言える弟子達の交わりに聖霊が与えられることによって、「教会」は生き始めるのです。

礼拝と交わりを通して私達が神に触れることの出来る根拠がここにあります。私達は「信者の集まり」に加わることによって「信者の集まり/教会」に与えられた聖霊に触れるのです。そして、個々の霊性が落ちている時でも、「教会」に与えられた聖霊によって回復されて行くのです。

ある牧師がこんなことを言っておられます。「聖書は『神の御霊が自分達のうちに宿っていることを知らないのか』(1 コリント 3:16)と言います。知りませんでした。でも少しずつ知らされて行きました。『御国来る。下手な説教する時も』。こんな川柳を作ったころから『牧師や信徒の実力が「教会」の力のすべてではない』と思えるようになりました。『教会』はそもそも伝道する実力などもっているわけではありません。聖霊を待ちつつ、聖霊の力をうけとりつつ伝道できるだけなのです」(小島誠志)。

「教会」が「教会」である根拠、「教会」が福音を宣べ伝えることの出来る根拠、礼拝を通して私達が神に触れることが出来る根拠、それは「教会」にイエス様を通して神の聖霊が与えられているからなのです。感謝です。

### 3: 「教会」の使命

最後にイエス様は、23 節「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります」(23)と言われました。これは、弟子達に誰かの罪を赦す権威があるということではありません。いや、ある神学者は「弟子が聖霊を受けた時、その聖霊の役割には、罪から人を聖めることもあった」と言っています。その意味で、教会に、罪を赦す働きが委ねられていると言えるかも知れません。しかし、それは「弟子達が罪を赦すことが出来る」というよりも、むしろ「弟子達(教会)は罪の赦しのメッセージを伝えることが出来る」ということではないでしょうか。

ローマ帝国による初代教会迫害の様子を描いた「クオ・ヴァディス」という映画があります。次のような場面があります。ネロ帝によるキリスト者迫害の時期、1人のキリスト者の女性がローマ軍の高級将校から見せめられます。相手がローマの支配者階級の間人ですから、彼女も最初はその気持ちを受け入れることが出来ませんでした。しかし、内心では少しずつ惹かれて行くのです。彼自身は、彼女を通して既に少しずつキリスト者の側に立ち始めていました。しかしキリスト者の仲間は、彼女がローマの将校と近づくことを絶対に許そうとしません。その時、ローマの信者を励ますためにやって来たペテロがこう言います。「主は、御自身を迫害する者さえ赦され、御許に招かれたのだ」。そうすると、横に座っていたパウロが自分を指差すのです。そうやって、ローマ軍の将校であったその男は、キリスト者の仲間に迎えられ、信者になって行くのです。

つまりイエス様の使信を運ぶのに最もふさわしいのは、イエス様のことを良く知っていた弟子達だったのです。イエス様はどんな人に近づき、どんな人に神の赦しを宣言し、逆にどんな人に対して悔い改めを求められたか。イエス様と歩いた3年間、彼らはそれを見て来たり、十字架と復活のイエス様を体験して、イエス様のメッセージを身体で合点して、地上の伝道的生活でイエスが言われたこと、なされたこと、その意味がよく分かったのです。例えば、ヨハネは言います。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1 ヨハネ 1:9)。彼らはイエス様のメッセージが良く分かったから、心から悔い改め

ている人に対しては、キリストの赦しを語る事が出来たし、逆に神に対する悔い改めも、神の愛に対する感謝もない人に対しては、悔い改めを勧める事が出来たのです。

申し上げたように「教会」の働きも、またその点にあるのではないのでしょうか。「教会」は、誰かの罪を赦す権威を持っている訳ではありません。しかし「教会」は、自分の弱さを思い、罪を悔い、神に赦しを求め、神に近づこうとする人に対して、神の赦しを語る事が出来るのです。ある精神医が言いました。「もし人間が過去の罪を拭い去られ、つらい過去から解放されることが出来るならば、世界中の精神病院の患者の90%は出てくる事が出来るだろう」。私達は、皆それぞれに「赦されたい」と思う過去の傷を背負っているのではないのでしょうか。「赦されたい」と願う人に、神は「教会」を通して「赦し」を語って下さるのです。また、教会は、自分の罪を認めず、神に対して何の悔い改めもなく、神を無視して生きる人々に「神に立ち帰り、神の赦しと祝福を受けて下さい」と勧める事が出来るのです。いや、その責任があるのです。

大きな特権であり、責任です。その為には、私達がイエス様の御心を良く知ることが重要です。難しいです。でも、こんな話があります。「イエス様が天に昇られた時、天使が言うのです。『イエス様、随分大変でしたね。ところでイエス様の始められた仕事は、この後、どうなりますか』。イエス様は言われました。『私はペテロやヨハネやその他の何人かの人達に後を頼んで来ました』。天使が疑わしそうに、また心配そうに言いました。『何だか頼りない話ですが、その他にも何か手を打って来られたのでしょうかね』。イエスは言われました。『いや、それだけです。私は彼らを頼りにしています』。この小さい教会である私達もあてにされています。皆で励まし合って、神に従う歩みを選び、主に忠実な「教会」を育てて行ければと思います。そして神の赦しを必要としている人に、赦しの言葉を、主にある希望を、伝える事が出来れば、と願います。

#### 4：終わりに

使徒信条は「我は…聖なる公同の教会…を信ず」と告白します。「教会を信ず」とは、「教会」の中におられる方を信じるということではないかと思えます。「教会」に、私達の交わりの中に、御自身の血を流し、肉をさいて私達を赦し、そして召して下さった方がおられることを、その方が分け与えて下さった霊がおられることを信ずるということではないかと思えます。その方が、今朝も、礼拝を通して私達に新しく触れて下さったことを感謝して、新しい週の歩みを進めて行きましょう。